保存

続・福井の肖像画

表紙写真　◇伝・淀殿像（奈良県立美術館蔵）

続・福井の肖像画

寛恭院（阿部正弘夫人）像

福井市立郷土歴史博物館

はじめに

肖像画は、わが国の造型活動のなかで、重要な位置をしめてきました。古代には専ら聖賢、祖師の像など鑑戒や崇拝の目的で描かれましたが、やがて像主を記念し永遠にその姿を遺すために制作されるようになります。

そのため、像主の相似だけではなく、個性や思想的背景をも表現して描かれました。

日本にはまず、中国から禅僧像（頂相）が輸入され、その影響をうけて中世以降の武家社会にまで及びました。

今回の展観では、前回にひき続き肖像性の極めて高いものから現代の創作画像に至るまで、福井県ゆかりの歴史人物の画像と、福井県内に所蔵されている各社寺や個人、資料館・博物館の画像を史・美・哲学の立体的な視線でとらえ、紹介してみました。列品を通じて各歴史人物への関心や理解を深めて頂ければ幸甚です。

福井市立郷土歴史博物館

凡例

一、本書は、平成六年十月一日～十一月三日迄を会期として開催した、特別展「続・福井の肖像画」の解説図録である。

一、収録画像は、およそ像主の生存年代順とした。

一、前半部に画像大方の写真を収め、後半部には全展示画像の解説を載せている。

一、解説は、画像名・数量・制作時期・寸法・所蔵者名・解説の順に記述した。寸法は、センチメートル（糎）、縦×横で示した。

一、所蔵者名は、本館の収蔵品については、「本館蔵」・「旧市立福井図書館蔵」「福井市春嶽公記念文庫」寄託品については、「○○市○○氏寄託」「越葵文庫松平宗紀氏蔵」として明記した。また、今回の展示に限って諸家より借用した画像については、「○○県○○市　○○氏蔵」「○○市　個人蔵」又は単に「個人蔵」等と表記してある。

一、収録画像に付した番号は、図版・解説に共通している。

③ 澤村吉重像

② 楠木正成軍陣影

⑤ 武田信玄軍陣影

④ 上杉謙信軍陣影

⑥武田信玄二十四将図（伝・旧山縣家本）

⑦伝・淀殿像

⑨ 織田信長像

⑧ 常高院像

⑪ 豊臣秀吉像（神戸市博本）

⑩ 豊臣秀吉像（高流寺旧蔵本）

⑬ 徳川家康像（久能山・天海本）

⑫ 徳川家康像（西福寺本）

⑮ 蒲生氏郷像（九鬼本）

⑭ 丹羽長秀像（顕本寺旧蔵本写）

⑰ 結城秀康像（大宝寺本）

⑯ 結城秀康三将軍陣影

⑲ 土屋正明像

⑱ 永見長次像

㉒ 松平忠昌像（東光寺本）

㉑ 松平忠昌像（運正寺本）

㉔ 松平光通像（大安禅寺本）

㉓ 黄梅院像

㊸ 寛恭院像（阿部正弘自詠・自筆和歌賛）

㉕ 小笠原政信像

① 児島高徳故事図

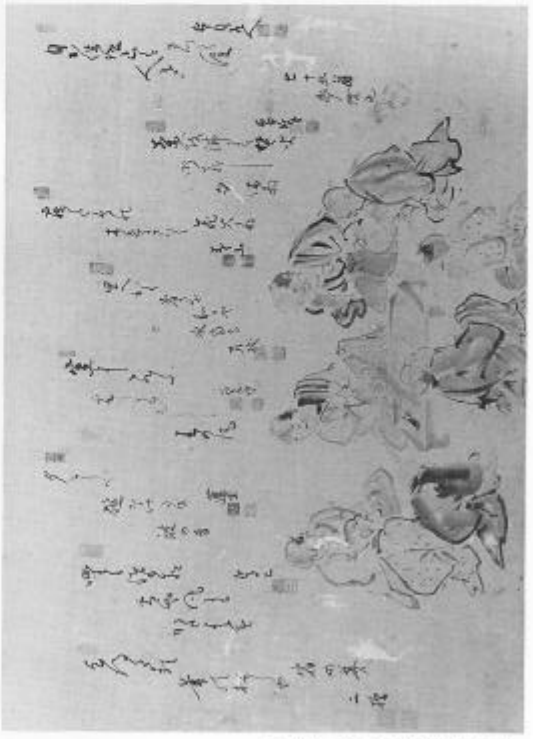
㉗ 佐久間真勝像

㉖ 小笠原政信母像

㉘ 杉田玄白像

㉙ 岩佐勝以像

㉚ 松平春嶽像



㉛ 俳句会図（高畠夢蝶画）

⑭ 武田耕雲斎像（須木本）

⑫ 松平茂昭像

⑰ 山本条太郎像

⑮ 谷口安定像

㊳ 西脇呉石像

㊲ 東郷正像像

㊵ 三上誠像

㊴ 新道繁自画像

㊷ 松平慶民像

㊶ 土岡秀太郎像

㊹ 黒田實像

㊸ 井上幸子像

㊹ 松崎真一像（玉村晋一画）

㊺ 冨田惣七像（玉村晋一画）

㊻ 井幕凡得像（雨田光平画）

㊼ 玉村晋一自画像

㊾ 榊原仟像（今野草三画）

㊿ 榊原仟像

歴代福井藩主とその夫人たちの肖像画について

足立尚計

歴代福井藩主とその夫人たちの画像については、これまで特にまとめられたことがなく先行の研究史を紹介することはできないが、昨年よりの調査により明らかになったことを中心に紹介しておこう。まず、管見に入った肖像画を列記してみると次の表のごとくである。

歴代福井藩主・夫人の肖像画一覧

	画像名	像主の身分	紙・絹本の別	作者・賛文筆者等	時代・寸法（cm）	所蔵者・（備考）
①	結城秀康三将軍陣影	越前福井藩祖	紙本着色	福井孝顕寺開山舜国洞授賛	江戸初期。一四一・五×一〇六・五	武生龍泉寺蔵（福井孝顕寺旧蔵）（永見長次・土屋正明二将を加えて）
②	結城秀康像（群馬・孝顕寺本）	右同	未見	未見	未見	群馬孝顕寺蔵（秀康少年時の姿）
③	結城秀康（運正寺本）	右同	絹本着色		江戸初期。九三・六×五六・〇	福井運正寺蔵
④	結城秀康（武生・大宝寺本）	右同	紙本着色		江戸初期。一〇八・六×四七・二	武生大宝寺蔵
⑤	松平忠直像	越前福井二代藩主	紙本着色	伝松平忠直筆	江戸時代。一〇七・〇×四七・四	大分浄土寺蔵
⑥	松平忠昌像（運正寺本）	越前福井三代藩主	紙本着色		江戸初期。一一三・〇×四六・一	福井運正寺蔵
⑦	松平忠昌像（東光寺本）	右同	絹本着色	賛有	江戸時代。九八・〇×四八・七	福井東光寺蔵（黄梅院像と双幅）

⑧	松平忠昌夫人黄梅院像	越前福井三代	絹本着色		江戸時代。九五・七×四五・二	福井東光寺蔵（松平忠昌像と双幅）
⑨	毛利秀就夫人龍昌院像	越前藩祖結城秀康二女	未見	不詳・石潭良全賛	江戸初期。未見	京都龍華院蔵（毛利秀就は長門萩二代藩主）
⑩	松平光通像（大安禅寺本）	福井四代藩主	絹本着色	狩野元昭画	江戸中期。一四五・〇×八七・一	福井大安禅寺蔵
⑪	松平光通像（佐々木本）	福井四代藩主	紙本着色	佐々木長淳（ながあつ）模写	幕末。四六・八×三二・七	越前松平家蔵
⑫	松平光通乳母長光院像	福井四代藩主乳母	紙本着色	右同	幕末。四四・六×三一・五	越前松平家蔵
⑬	松平吉品（昌親）像	福井五代・七代藩主	絹本着色	瑞源寺二世鐵叟道剛賛	江戸中期。七〇・二×四二・二	福井瑞源寺蔵
⑭	阿部正弘夫人寛恭院像	福井十三代藩主松平治好五女備前福山藩主夫人	絹本着色	吉田洞谷画阿部正弘和歌賛	幕末。一〇七・〇×四二・〇	東京個人蔵（阿部家伝来）
⑮	松平春嶽像（油絵）	福井十六代藩主	油彩キャンバス	佐々木長淳（ながあつ）画	明治時代。七〇・〇×五〇・〇	福井市春嶽公記念文庫蔵
⑯	松平春嶽像（春文本）	右同	絹本着色	繁画	明治時代。一一二・一×四〇・二	福井市春嶽公記念文庫蔵
⑰	松平春嶽像（越文本）	右同	絹本着色	波々伯部（ほうかべ）捨四郎画	明治時代。一一二・一×四〇・二	越前松平家蔵（茂昭像と双幅）
⑱	松平春嶽夫人勇姫像	福井十六代藩主夫人細川斉護三女	油彩キャンバス	佐野常成画	明治時代。四二・五×三三・二	福井市春嶽公記念文庫蔵
⑲	松平茂昭像（越文本）	福井十七代藩主	絹本着色	波々伯部（ほうかべ）捨四郎画	明治時代。一一二・〇×四〇・三	越前松平家蔵（春嶽像と双幅）
⑳	松平茂昭像（越文草川本）	右同	絹本着色	草川重遠画	明治時代。一一二・五×四四・六	越前松平家蔵（構図は⑲に同じ）

肖像画の定義が、寿像と遺像に限ったものであるとすれば、このうち、二代藩主、松平忠直像は、伝来により、自画像としている向きがあるが、全く錦絵の描出であり、これを定義された肖像画群に加えることは、躊躇せざるを得ない。

また、⑮松平春嶽像（油彩）以下の肖像画群は、既に写真技術の渡来以降に描かれたものであるから、一般に云う定義的肖像画の史的興味には些か欠けるものがあろう。

さて、歴代福井藩主とその夫人たちの肖像画がさかんに描かれたのは、福井藩初期と、幕末から明治維新後に集中しており、定義的肖像画の描かれた時期は、前者のみとみて良い。そこで、誌面の許す限り、福井藩初期の肖像画について概述してみよう。配流された忠直は別として、初代藩主結城秀康より五代藩主松平昌親（七代再勤＝吉品（よしのり））までの画像が揃っていることは注目すべきことであろう。

そして、それ以後、江戸後期まで、藩主の画像を伝存し得なかったか或いは描かれなかったものと推察されることについても看過できない事実であるといえよう。すなわち、藩祖結城秀康が、越前一国六八万石で入封してから、二代忠直（六八万石）・三代忠昌（五二万石）・四代光通（四五万石）・五代昌親（四七万石）と、大藩であった時期にのみ、肖像画も残されており、六代綱昌の改易以後すなわち、半知になった貞享の大法以降は描かれなかったと推測できよう。なんとなれば、画像を伝存しているのは大方が、各藩主がそれぞれに菩提寺として建立したか、或いは歿後、その菩提を弔う目的で建立された各刹であり、その開基として描かれた藩主の寿・遺像が大半を占めているからである。すなわち肖像画は寺院の建立と深くかかわっており、経済的に寺院建立が可能であった江戸時代初期に、画像も描かれたとみてよいであろう。

さて、初代結城秀康像は、群馬・孝顕寺本をはじめ少年時代から三十三歳で歿するまでの各種の画像（単独像・三将図・軍陣影）がよく揃っており、各々の伝来も興味尽きない。

特に大奉寺本は新出のものであり、今後の研究が期待される。また、三代忠昌像は、彩色豊かで、紙本としては保存状態のよい遺像が運正寺にあり、また夫人、黄梅院像と対幅になった遺像も東光寺に伝存する。大安禅寺本の光通像は歴代藩主の画像中最も大きなもので、寺院の規模に比例しているのがポイントであろう。誌面の都合で紹介できないが、福山藩主で幕府老中の阿部正弘の夫人、寛恭院（謹子）像は、藩主ゆかりの画像中最も美術品としてすぐれた価値をもつ名品である。

（福井市立郷土歴史博物館主任学芸員）

解説

①児島高徳故事図　一幅
明治時代ヵ
絹本着色　一〇〇・六×四〇・七
福井市　個人蔵

左手に矢立を右手に筆を持ち、山桜の古木の幹を凝視して思いをためる武者の姿を生気あふれる趣で描出している。児島高徳（生歿年不詳・吉野時代＝南北朝時代の人）は、元弘の乱（一三三一）で隠岐に遷された後醍醐天皇を途中で救い出そうとして、備前・播磨の境である舟坂山や美作国杉坂で隠れ臥して時を待ったが失敗。ついに院庄まで追ってようやく天皇の行在所（御宿）に至った。そこで高徳は大きなる桜の古木を押削り、十字の詩「天勾践ヲ空ウスルコト莫レ、時ニ范蠡無キニシモ非」（原漢文・大意＝天の神様よ、中国の幽囚された越王勾践のごとき後醍醐天皇を亡きものにし奉ってはなりませぬぞ。この時に范蠡という忠臣がおりましたように、陛下にも忠義の者がおるのですぞ。お心強くお待ちあそばせ。）を書いて志を述べた。次の日の朝警固の者は、詩意を解せなかったが、天皇はおわかりになり、龍顔をくずされたという（『太平記』）。

本図は、この故事を描いたもので、背景に警固の柵を加えるなど、古典籍を忠実に写している。高徳の故事図は、楠木正成父子桜井別離の図と共に明治以降よく画題として選ばれたが、高徳図に限って云えば、本像のように像主の表情を描出しているのは少ない。

②楠木正成軍陣影（伝懐良親王筆写）　一幅
江戸時代
絹本着色　一〇七・四×四〇・五糎
福井（京都府木津町）市　個人蔵

楠木正成（？～一三三六）は、南北朝（吉野）時代の武将で、河内の土豪。後醍醐天皇に従い鎌倉幕府討幕のため河内赤坂城で挙兵した。建武中興では河内・和泉両国の守護となったが足利高（尊）氏が叛旗を翻すと交戦して、摂津湊川で戦死した。本像は、烏帽子に小具足姿で弓を持ち矢を背負う。更に、太刀・腰刀などを佩かせいかにも中世武将らしき構図をとっている。顔もよく整っており楠公の理想化のみえる軍陣影として描出されている。また鎧直垂や臑当などには菊紋又は菊水紋が散りばめられている。楠公像は、水戸学の影響で江戸中期以降描かれるようになるが、そのほとんどが画題として正成・正行父子の「桜井の別離」の故事をとっているものが多く正成単独像は、山鹿家本・大阪城天守閣本・奈良県立美術館本などが知られるものの数は少ない。本像は軸裏書に「正成朝臣肖像　長州侯御一門毛利伊賀所蔵　懐良法親王御筆　子息正行請二後醍醐天皇第八王子懐良親王一三回之時所用之図　守澄摹レ之ヲ菊濱宰判精舎蔵」と興味深い伝来を記しているが、当然楠公景仰の為に理想化された記述であろう。しかし忠臣楠公の顕彰史の上からは貴重な史料である。

毛利伊賀は、萩毛利家の一門で吉川就頼を祖とする大野毛利家のことである。なお越前国白山平泉寺の衆徒、恵秀律師は正成の甥であると『平泉寺縁起物語』にみえている。

③（高浜町指定文化財）澤村吉重軍陣影　一幅
江戸時代初期
絹本着色　一一一九・〇×五四・〇
高浜町　佐伎治神社蔵

澤村大学助吉重（一五六〇～一六五〇？）は、高浜城主逸見昌経（若狭武田氏の被官、生歿年不詳）の家臣で、天正十年（一五八二）丹後宮津の守護細川氏に仕えた。細川氏は後に熊本へ移封、大学もこれに従ったが、慶安三年（一六五〇）九十一歳で歿したという。本像は、大学歿後間もなく描かれたものとみられる。賛文には彼の小伝が附され、また図中の兜には「林月浄西居士」の法名がみられる。あらゆる武具を並べ、顔面を強調し竹の簀子に座して眼光鋭く一点を凝視する姿は、戦国を生きぬき太平の世を迎えた像主の生きざまを実によく表現しているといえよう。

④上杉謙信軍陣影　（土佐光起画）　双幅
⑤武田信玄軍陣影
江戸時代初期～中期
紙本着色　各八三・〇×三八・三糎　個人蔵

両像いずれも、肥前松浦家に伝来した画像で、双幅として描かれている。松浦氏が両将の武勇を景仰するために所蔵していたものであろう。武田信玄軍陣影は、諏訪法性の兜を冠し、右手に軍配・左手に念珠を持つといった信玄軍陣影の代表的な構図をとっているが、上杉謙信軍陣影は、旗指物を背負い采配を持った青年の容姿で描かれ、よく知られる入道像のイメージを大きく変える珍らしい作品といえる。

彩色は土佐派の特技とする鮮麗な発色で、描写も細緻であり、光起らしい作品である。款記に七十二歳とあり、光起の筆で年齢を明記する画像は少ない。なお、上杉・武田両将の家臣団の子孫の一部は越前松平家に召抱えられている。

⑥武田二十四将図（伝・山縣家旧蔵本）　一幅
江戸時代
紙本着色　一〇一・二×五二・八糎　福井市　廣木公利氏蔵

武田二十四将図は、元禄年間（一六八八～一七〇三）以降、さかんに描かれた画像で、江戸時代後期には、十一将・二十五将・二十六将が描かれた例もある。二十四将という呼称は後世のもので『甲陽軍鑑』の流布によって書中に登場する主な猛将・剛将を狩野派の絵師等が撰定したとされており、各将の顔ぶれは画像により一定しない。さて、本図は、県内では数少ない武田二十四将図で、しかも、福井藩高知席山縣家旧蔵のものと伝えられている。本図は、各将の表情も他本と比して柔和で脹よかである。また各将の人名が記されており、山縣家の遠祖という山縣三郎兵衛尉昌景は信玄と対面して左側、即ち武田勝頼と向かい合って描かれている。表具の一文字に武田菱紋を用いているのは興味深い。

⑦伝・淀殿像
桃山時代
絹本着色　七二・二×三六・三糎　奈良県立美術館蔵

淀殿（一五六七～一六一五）は、浅井長政・お市の方の長女で、ちゃちゃと称した。浅井氏滅亡の後は、再嫁した母に従い越前北庄城に入って、養父柴田勝家のもとにあったが、更に柴田氏が滅亡すると、豊臣秀吉に保護されてのちに、秀吉の側室として寵愛をうけ二男を生んで権勢をほこったが大坂夏の陣で自害した。淀殿像は、高野山持明院蔵の持明院本と、京都養源院蔵の養源院本がある。両本ともほぼ構図が同じでどちらかの一本がもう一本の臨写本と推測される。

またこの両本は、同じ持明院が所蔵する淀殿の実父、浅井長政の容貌と似ており、淀殿は、母お市の方よりもむしろ父長政似で

あったように推測できよう。しかし、伝淀殿像は、さきの二本とは、顔立ちの異なるもので、むしろ母親お市の方の容貌に酷似しているといえる。

このことから両親のどちらかに似ていたかなど淀殿の容貌を推測するのは難しい。伝淀殿像は、顔立ちも美しく彩色も豊かで、和歌賛の用筆も桃山時代のものとみてもよいであろう。打掛姿で繧繝縁の青畳に座し、両手で念珠を持っている。装束には、いたるところに菱紋や松葉・梅・笹などの寿紋のほか、萩・菊（田村草ヵ）・竜担・藤袴などの秋草と満月らしきものがみえる。和歌賛は、「たゞたのめしめじがはらのさしもぐさ我世の中にあらむかぎりは」と読める。これは謡曲「田村」の一節である。

⑧（小浜市指定文化財）常高院（京極高次夫人・初・藤子）像一幅

江戸時代初期

絹本着色　一一九・六×五一・六糎

小浜市　常高寺蔵

常高院（一五六八～一六三三）は、小浜藩主、京極高次の夫人で浅井長政を父に、織田信長の妹、お市を母として生れた。名は初（藤子）と称す。姉は淀殿・妹は徳川二代将軍秀忠室崇源院である。近江・小谷城落城後、信長に引きとられ、母、お市が越前北庄城主、柴田勝家と再婚すると、姉妹ともに北庄へ入った。養父勝家が羽柴（豊臣）秀吉によって滅ぼされると、秀吉に引きとられ、従兄の高極高次に嫁した。大坂の陣では、徳川家康の意向で豊臣・徳川両氏の和議をつとめている。小浜市常高寺には墓がある。本像は、彩色豊かな尼僧姿で右手に念珠を持っている。菊花菱紋の御簾を飾った内陣で繧繝縁の上畳に座すといった構図は、若狭小浜・常高寺開基として最高位の描出であるものと思われる。箱表書に「常高寺殿肖像」とあり、現在は、福井県立若狭歴史民俗資料館に寄託されている。

⑨織田信長像　一幅

江戸時代

紙本着色　一〇五・七×五七・三

兵庫県立歴史博物館蔵

織田信長（一五三四～八二）の肖像画は、神戸市立博物館本（重要文化財）や長興寺（愛知県豊田市）本をはじめ数多いが、本像は京都、大雲寺本信長像の模写本とみられ、模写年代は、江戸時代後期とされている。本像は大雲寺本を忠実に模写しており御簾の内の上畳に束帯姿で座し把笏している姿は、神影の構図をとっている。ところで織田氏は、本県丹生郡織田町鎮庄の剣神社の旧社家の出身であることがほぼ定説のようになっている。なお当地では織田は「オタ」「オッタ」と発音する。

⑩豊臣秀吉像（高流寺旧蔵本）　一幅

桃山時代

紙本着色　五九・二×二九・六糎

大阪城天守閣蔵

豊後竹田（大分県竹田市）の高流寺に伝来していた秀吉像である。青上畳に座し、有紋白袴と有紋（藤紋ヵ）の白束帯姿で、冠の垂纓には、木瓜摺紋がみえる。高台寺本・叡福寺本・神戸市立博物館本など、よく知られている神像的な構図ではなく、また讃も落款もみられないことから異色の秀吉像といえよう。顔も他本に比較して、少々あどけなさを感じさせるユニークな親しみ易い作品である。ただ、寿像・遺像・供養像のいずれに見ても、冠の紋・上畳の縁紋など太閤秀吉の像としては、有職の上でなお考究する必要があるだろう。さて、秀吉は、柴田勝家の攻略のために来越、愛宕山（足羽山）に陣を置いた。その史跡は、天魔ヶの

池として伝承されている。

⑪豊臣秀吉像（複製）　一幅

原本＝桃山時代

原本＝絹本着色　八一・六×三六・九糎

長浜市立長浜城歴史博物館蔵

淡墨による桐の絵を背景にして内陣に座す豊臣秀吉（一五三六～一五九八）像は、その構図から推して神像として描かれたものと思考される。秀吉画の多くはこのような豊国大明神として描かれたものであり、本像もまたこの系統の画像である。顔貌をやや理想化し、荘厳さを感じさせる。原本は、神戸市立博物館の所蔵である。

⑫徳川家康像（西福寺本）　一幅

江戸時代

絹本著色　一〇八・八×五〇・六糎

敦賀市　西福寺蔵

越前藩主（福井藩祖）結城秀康の実父、徳川家康（一五四二～一六一六）の肖像画である。家康画像は、全国にも数多く、中には、極めて華麗な神像として描かれたものがある。

本像は、似絵の形式を採った束帯像で、ごくシンプルな構図である。高麗縁雲形紋様の畳に更に繧繝縁の青上畳を重ね。その上に正笏をして座している。本像の箱表書には「原印九番・東照大權現御神影従越前大守御安置之」とあり、又、軸裏書にも「東照公尊影」とある。西福寺は、中世以降、北近江・越前の中心的な浄土宗寺院として知られ、浄土宗を奉じた徳川氏との関係によりこうした尊像が伝存したのであろう。箱表書にある越前大守は、越前二代藩主、松平忠直のことであろうか。そうすれば忠直の思想研究の上で看過できない史料ともなろう。

⑬徳川家康像（久能山本・天海賛）　一幅

江戸時代

紙本着色　九五・二×四四・三糎

久能山東照宮博物館蔵

天海の賛がある束帯姿の家康像で、神影として描かれている。家康像はこうしたものが一般的で、東照権現として尊崇の対象とする目的で描かれたようである。賛文は、右より「東照大権現　我滅度後　於末法中　現大明神　広度衆生　山門三院執行探題　大僧正天海（花押）」とある。

⑭丹羽長秀像（顕本寺旧蔵本模写本）　一幅

原本＝桃山時代

紙本着色　七九・四×三六・五糎

東京大学史料編纂所蔵

丹羽長秀（一五三五～八五）は、信長の家臣で、信長の養女をめとり、信長の信任が厚かった。近江佐和山城主となるが、本能寺の変後豊臣秀吉と共に明智光秀を倒し、以後秀吉に従った。柴田勝家攻めの功により、柴田滅亡後の北庄城主となった。北庄城主時代には一向一揆に悩まされ、ついに病を得て天正十三年（一五八五）四月十六日に歿した。画像は右手に念珠、左手に扇子を持った素襖姿。丸顔の穏やかな風貌で描かれ、本像よりやや若年期の姿を写したとみえる福島、大隣本とその雰囲気が共通している。像主の頭上には「南無妙法蓮華経」と書かれ、その右に「前越州太守大隣宗徳大居士　天正十三酉九月十六日」左に「日行（花押）」がみえる。顕本寺（福井市左内町）は、もと一乗谷にあったが天正五年（一五七七）以降足羽山麓に移った。原本が戦災で焼失したので、本像は模写本といえども貴重な史料価値を有する。

⑮蒲生氏郷像（九鬼本）　一幅

原本＝桃山時代
紙本着色　一二三・一×五四・〇糎　東京大学史料編纂所蔵

蒲生氏郷（一五五六～一五九五）は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた武将で、天正十二年（一五八四）伊勢松島（松坂）十二万石を与えられ、のちに、会津若松四十二万石　同加増されて九一万九三〇〇石を領しが四〇歳にして伏見の自邸で病死した。

越前へは信長に従い天正元年（一五七三）の朝倉攻めで入国している。氏郷像は、福島県・西光寺本や本像など数本が知られるが、いづれも眉濃く揉み上げの豊かな束帯姿である。

本像は、束帯に正笏をした構図で、摂津三田藩の分家で、丹波綾部藩主九鬼氏の一族、帝国博物館長九鬼隆一が、東京帝国大学に寄贈した九鬼本氏郷像の写で、原本は桃山時代のものとみられる。

⑯（武生市指定文化財）結城秀康三将軍陣影　一幅
江戸時代初期
紙本着色　一四一・五×一〇六・五糎　武生市　龍泉寺蔵

本像は、越前藩祖結城秀康と、慶長十二年（一六〇七）四月、秀康に殉死した重臣の土屋正明（対面して右）と永見長次（対面して左）の画像である。賛文は、結城家の菩提寺、福井市　孝顕寺開山、舜国洞授による。このことから本像は、三将の歿後間もない時期に描かれたものであろう。本像はもと、孝顕寺にあったが、現在は武生市の名刹、龍泉寺が所蔵している。

⑰結城秀康像（大宝寺本）　一幅
江戸時代
紙本著色　一〇八・六×四七・二糎　武生市　大宝寺蔵

初代越前藩主、結城秀康（一五七四～一六〇七）の肖像画のうち、単独像として現存するものは、群馬県前橋市の孝顕寺本・福井市の運正寺本と本像の三本が知られる。本像も他二本とよく似た似絵の構図を採り、繧繝縁の青上畳に葵紋散の束帯姿で座し、右手に中啓を持っている。孝顕寺・運正寺本との違いは、口髭が描かれている点で、これは、同じ武生市の龍泉寺に伝存する結城三将図中の秀康像と同様である。本像は、構図的にみれば、結城三将図と、孝顕寺・運正寺両本の中間的な作品といえよう。大宝寺は、浄土宗で、越前藩老本多富正の創建である。大宝寺の縁起書である『親縁山開基来由録』の「浄光院殿御位牌御絵像部」によると本像は、秀康の実子で富正の養子となった吉松が、実父を偲ぶよすがとして秀康の画像を運正寺本秀康像を描いた絵師某人と同じ絵師に描かせたものであると記している。

⑱永見長次像　一幅
江戸時代初期
絹本着色　一〇七・〇×四六・八糎　福井市　運正寺蔵

結城秀康・土屋正明両像及び松平忠昌像と同じ箱に納められている。その箱表書には、「黄門様土屋左馬助永見右衛門御影三幅此内ニ隆芳院（松平忠昌）様尊影一幅入」とあり、箱裏書には、「此表具并箱　梵譽（運正寺八代）寄進之」とみえる。梵譽は四代藩主松平光通によって運正寺に招聘された。軸裏に「慶長十二年四月九日　閑窓道有大禅定門」「永見右衛門」の附箋がある。

永見右衛門尉長次（一五八四～一六〇七）は、十八歳で結城秀康に仕え、越前で、一万五千三百石を領したが秀康歿後の慶長十二年（一六〇七）四月八日、二十四歳で殉死した。本像は、朱の

束帯に、中啓を持っている。若くして殉じた像主の忠誠心が窺われる作品である。

⑲土屋正明像　一幅

江戸時代初期

絹本着色　一〇六・六×四六・五糎

福井市　運正寺蔵

冠に朱の束帯・上畳という構図で、雲に竹模様の金色の中啓を持つ。さきの永見長次像とあらゆる点で酷似する。軸裏に附箋で「慶長十二年四月十一日高岳崇心大禅定門」「土屋左馬助正明」とある。軸裏には「慶長十二年四月十一日高岳崇心大禅定門」「土屋左馬助」との附箋がある。土屋左馬助正明（一五八一～一六〇七）は、もと徳川家康の家臣で、その後結城秀康に仕えた。大野三万八千石の城主であったが慶長十二年（一六〇七）四月八日、秀康が歿した三日後、二十七歳にして割腹して秀康に殉じた。

⑳徳川秀忠像（複製）并添書　一点

原本＝江戸時代

紙本活版　六二・三×四六・七糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

繧繝縁の青上畳に座し、束帯姿の本像は、上野国（群馬県）前橋松平家伝来の徳川二代将軍秀忠とされるものである。前橋松平家は秀忠の実兄で越前藩祖となった結城秀康の五男、松平直基を祖とする。本像は明治四十三年十月三十日東京帝国大学が複製・発行したもので、越前松平家家従であった笹川章門筆の添書（一八・〇×三一・五糎）に次のように記されている。「徳川二代将軍秀忠公御肖像　右結城孝賢寺什物の処、松平直之殿御家江　右御像幅御引取ニ相成　文部省史誌編纂に於て右版に御写し取被進之　明治四十三年十二月　章門誌」。

㉑松平忠昌像（運正寺本）　一幅

江戸初期

紙本着色　一一三・〇×四六・一糎

福井市　運正寺蔵

松平忠昌（一五九七～一六四五）は、越前福井三代藩主、結城秀康の二男。はじめ越後高田藩主であったが、兄忠直が配流されると越前五〇万石を継ぎ、更に二万五千石加増されて大藩を支配した。本像は像主の頭上に「隆芳院殿前参議廓翁貞眞大居士　霊儀乙酉八月朔日」と法名が見える。束帯姿で眼光鋭く描出されていて顔面の保存状態は良好である。

桐・藤・葵模様が畳縁や単に細緻に描かれているのは絵師の力量の非凡なことを感じる。像主の頭上に法名を冠していることなどから忠昌歿後間もない時期に描かれた遺像とみられる。

㉒松平忠昌像（東光寺本）　一幅

江戸時代

絹本着色　九八・〇×四七・七糎

福井市　東光寺蔵

繧繝縁の上畳に束帯で座す。石帯や飾剣・袍には葵紋がみえ、まさに藩主の堂々とした威風を偲ばせる。本像は、忠昌夫人黄梅院像と双幅で東光寺に伝来したもので、東光寺（福井市豊島＝臨済宗妙心寺派）は、山号を富士山と号し、元和四年（一六一八）松平忠昌が夫人黄梅院のため、美濃国伊自良の東光寺住持、瑞雲を召して旧領地越後国高田（現新潟県上越市）に創建。寛永元年（一六二四）の忠昌移封により当地へ移された。新出の肖像画である。

㉓黄　梅　院（松平忠昌夫人）像　一幅

江戸時代

絹本着色　九五・七×四五・二糎　　福井市　東光寺蔵

三代藩主松平忠昌像と対幅で東光寺に伝来した新出の肖像画である。法衣に葵葉散の袈裟を着用し、右手には数珠、左手には中啓を持っている。黄梅院は名を花と称し、安芸広島浅野氏の祖長晟の兄弟で、甲府藩のち、和歌山藩主、浅野幸長の女として生れ、元和五年（一六一九）十一月二日に忠昌と婚姻。しかし同九年五月に歿した。はじめ越後高田東光寺に葬られたが夫忠昌の本藩相続により東光寺は福井に移された。

㉔松平光通像（大安禅寺本）　一幅

江戸時代

絹本着色　一四五・〇×八七・一糎　　福井市　大安禅寺蔵

松平光通（一六三五～一六七四）は、越前三代藩主、松平忠昌の嫡子で、のち四代藩主となった。藩内政の充実を計るとともに、文教政策に力を入れ、京都より伊藤担庵を招いて藩主教育にあたらせた。また、大愚禅師を招請して大安禅寺を建立、万治三年（一六六〇）には新田義貞の戦歿地を比定し、新田塚の建碑を行うなど士風の高揚にもつとめた。

しかし、寛文九年（一六六九）の大火で天主（守）閣を含めた福井城の大半を焼失した。

本像は、完全な束帯姿で肖像画としては堂々たる大幅で迫力がある。太い眉、厳しく鋭い眼は、温順で神経の細やかな像主の気質を表現している。大安寺第一の重宝であると記されている（松平春嶽筆『真雪草子』）本像は、光通の命を受けた画家、狩野元昭（一六二二～一六八一）が斎戒して写生したものである。歴代藩主の画像の中で作者の明確な数少ない寿像として貴重である。

㉕小笠原政信像　一幅

㉖小笠原政信母像　一幅

江戸時代

紙本着色　政信像＝一二三・二×五一・四糎
政信母像＝一二三・四×五一・四糎　　勝山市　松井つね子氏蔵

旧勝山藩士、松井家に伝来するもので、双幅になっている。小笠原政信は、下総国（茨城県）古河二万石の領主で、慶長十二年（一六〇七）に誕生。寛永十年（一六四〇）三十四歳で歿した。その後、養子貞信が、下総関宿、美濃高須を経て、元禄四年（一六九一）勝山二万二千七百石余を与えられた。政信像は侍烏帽子に直垂姿で片喰紋が鮮明に描かれている。政信母像は、打掛姿で綿帽子を冠し、柔和な表情で政信像と対面している。両像とも小絞縁上畳に座し、装束の有職と一致する。

㉗佐久間真勝（将監）像（狩野探幽筆　江雪宗立賛）　一幅

江戸時代初期

紙本着色　五九・五×二二・八糎　　個人蔵

佐久間真勝（一五七〇～一六四二）は、徳川家康の家臣で御使番・御作事奉行。はじめは豊臣秀吉の小姓であった。大徳寺の江月和尚の知遇を得て晩年は、大徳寺・龍光院の寸法庵主であった。本像は、白髪の像主が、黒頭巾に白衣を着し手を組んで花器の白椿と白梅を注視している。隠栖の身の静かな日々をよく描いた品格高い作品である。同じ探幽筆の真勝像（小熊家本＝重要文化財）と兄弟関係にある名品であろう。本像の賛者、江雪宗立は、大徳寺第一八一世であった。賛文の記すところにより本像が、真勝の没後三年目に描かれたものであろうことが知られる。

賛文＝「寸松菴主山陰宗可居士之肖像、国家宝器武門棟材　随侍之士覓賛語書以寒其白云　正保第二乙酉稔仲秋廿二日　江雪叟宗立□[宗立]印」とあり、また像主の右下に「探幽斎筆」の落款と朱文瓢印「守信」がみえる。

㉘岩佐勝以像（複製）　一幅

原本＝江戸時代

原本＝紙本着色　三五・〇×二四・〇糎

旧市立福井図書館蔵

岩佐勝以（一五七八～一六五〇）は、又兵衛と称し、荒木村重の子である。第三代越前藩主、松平忠昌に仕えたのち、江戸で風俗画家として活躍した。作品は、土佐派・狩野派を折衷し、独自の画技を呈した。本像は、晩年の勝以を隠やかな筆致で描いている。杖を肩にかけ竹の椅子にゆったりと腰を掛けている姿は伝承によると、死期をさとった勝以が、自画像を描いて福井の妻子のもとに届けたものという。本像には勝以消息と岩佐家の系図が附属している。原本は、静岡県熱海市のMOA美術館の所蔵である。勝以の作品には、『故事人物図』十二幅（福井県立美術館蔵）・『耕作図屏風』・『旧金谷（屋）屏風』などが知られ、また墓は、福井市興宗寺にある。

㉙杉田玄白像（石川大浪画・玄白自賛）

原本＝江戸時代

原本＝六五・五×二八・〇糎

早稲田大学図書館蔵

杉田玄白（一七三三～一八一七）は、若狭小浜藩医の子で、蘭学の祖と仰がれた人物である。オランダの解剖学書『ターヘル・アナトミア』を中川淳庵らとともに翻訳し、『解体新書』を著した。また、『蘭学事始』も広く知られるところである。本像には、玄白の自賛があって、文化九年（一八一二）正月元日の年記があるから、玄白八十歳の寿像であることがわかる。洋書と和漢書を両方において立膝で座す玄白の姿には、洋画の影響を受けた陰影法が用いられている。石川大浪は、谷文晁の洋風画の師ともいわれる玄白の門弟であり、いかにも蘭学者に相応しい肖像画といえよう。

㉚俳句会図（高畠夢蝶画）　一幅

江戸時代

紙本着色　四七・二×六五・二糎

武生市　島田清氏寄託

本図は、文化・文政頃狂画を描いて知られた福井藩居合の師範、高畠夢蝶（甚五衛門）の俳句会の図で各同人の俳句と自署が記されている。文台を囲んで八人の俳人が宗匠らしい硯前の人物を中心に思いをためている様子である。各俳人の確認は難かしいが、暮山とみえるのは、福井の俳人で、『なてしこ塚』『紅梅塚』の作者として知られる白寿坊系二代の中川惣右衛門（号＝恒心舎暮山）のことであろうか。

江戸時代の俳壇を垣間みる資料として、また伝存の少ない夢蝶の七十五歳の作品として貴重である。

㉛松平春嶽像　一幅

明治時代

絹本着色　一一二・一×四〇・二糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井十六代藩主、松平春嶽（慶永＝一八二八～一八九〇）は、徳川（田安）斉匡の六男として生れ、十一歳で福井藩主となる。将軍継嗣問題浮上のおりには一橋派であり、そのために井伊直弼との政争に敗れて隠居した。井伊歿後の文久二年（一八六二）政

界に復帰して政事総裁職となる。維新後は議定・大学別当などに就任したがのちに辞して著述に専念した。

本像は、明治十七年三月一日、五十七歳の時の正座写真をもとに描かれた半身像で、左下に「繁　謹写（印）」とみえる。

㉜松平茂昭像（草川重遠画）

明治時代

絹本着色　一一二・五×四四・六糎

本館寄託越葵文庫松平宗紀氏蔵

福井藩最後（第十七代）の藩主、松平茂昭（一八三六～一八九〇）の肖像画である。茂昭は、越後糸魚川藩主、松平直春の子で、安政四年（一八五七）糸魚川一万石の小藩を相続したが、十六代福井藩主、松平春嶽（康永）が、隠居することになり、その養子となった。

維新後は、藩知事となり侯爵を授けられた。

本像は、波々伯部捨四郎画の春嶽・巽嶽（茂昭）両公の双幅の巽嶽（茂昭）像と全く同じ構図で共に越前松平本家に伝来した。

㉝寛恭院（阿部正弘夫人松平氏）像　一幅

江戸時代

絹本着色　一〇七・〇×四二・〇糎

東京都　個　人　蔵

寛恭院は、福井十三代藩主、松平治好の五女で、名は謹と称し、文政五年（一八二二）三月二十九日に生れた。母は千種龍澤の女寿満である。天保九年（一八三八）二月二十三日、備前福山藩主で、江戸幕府老中として知られる阿部正弘に嫁した。しかし、嘉永五年（一八五二）八月十三日、三十歳の若さで逝った。浅草西福寺に葬られ、法名を「寛恭院殿真誉如實貞相大姉」と称する。本像は秋草模様の金屏風を背景に、飾小簞笥や、文机などを置きそこには、短冊や書籍が載せられている。飾小簞笥やその他の調度品には松平家よりの輿入道具らしく葵紋が確認できる。きらびやかで彩色豊かな打掛を着用し、吹輪髷に前帯姿で描かれている。和歌賛は、夫正弘が寄せ、「うきよをハよそになしつゝ法の聲しつけき國に今やすまゝし」

また、「朝夕にしのふおもひの増かゝみわすれたかみに写してそみる　正弘」と読める。

若くして亡した愛妻への情が犇々と伝わって来て心中察するにあまりある哀しき遺像である。幕末の激動期の老中、阿部正弘の人格を偲ぶには看過できない好史料といえよう。なお画像の作者は吉田洞谷である。

㉞（敦賀市指定文化財）武田耕雲斎像（須木直正筆）　一幅

江戸時代後期

紙本着色　五〇・三×四七・四糎

敦賀市　松原神社蔵

武田耕雲斎（一八〇三～六五）は、水戸藩士で、藩主徳川斉昭の藩主擁立に尽くし、のち家老となった。元治元年（一八六四）天狗党（水戸の軽格武士層を中心とした急進派）の主将となって、筑波山に攘夷延期を不満として挙兵、八〇〇名を率いて上洛の途中、衰退して金沢藩に降伏した（天狗党の乱）。その結果藤田小四郎らと共に斬罪に処せられた。

耕雲斎の画像は、水戸徳川家本の画集中のもの（三十五歳）が知られるが、本像は敦賀新保の本陣で軍略、天文を考えているところを、水戸浪士の一人須木藤助直正が、舟町の荷倉に監禁中、大黒の西野五兵衛に請われて写したものだという。カヤの円座に座し書籍を繙いている様子はのちに、耕雲斎と面識のあった者が「その真を得たるもの」と評したという。本像は全くの素人絵

で遠近方の使用もまずいものがある。しかし、かえってそれが忠実に描写した遺像として史料価値を有するものであろう。

㉟谷口安定像（大橋豪山画）　一幅

明治時代（明治二十九年）

絹本着色　九〇・〇×四五・〇糎

静岡県焼津市　谷口元一氏蔵

谷口安定（一学）は、明治時代の教育者・漢学者。天保九年（一八三八）福井藩老、本多屋敷で、父松軒の子として生れる。二十二歳のとき、江戸の若山塾に学び、文久元年（一八六一）立教館補講兼句読師となるが、のちに再び江戸で漢学・洋学を修めた。

慶応二年（一八六六）立教館教授となり、府中（武生）の人材育成に尽力したが、明治三年の武生騒動で連座、約六ヵ月獄中にあった。翌年、私塾を開いたあと明治六年には武生進脩小学校々長に、翌年山形県出仕。同八年大蔵省・元老院・外務省勤務などをへて、明治二十六年、立教館々長、同二十八年福井尋常中学校教諭となるが、翌年五十九歳で歿した。彼は、漢語の読みを国語風に読みかえ、イロハ引きにしたいわゆるあて字辞典である『魁本（かいほん）大字類苑』を父、松軒の遺志を継いで明治二十二年に刊行した。当代の武生を代表する漢学者であった。本像は、明治二十九年、太平洋画会所属の大橋豪山の筆による。老境の篤学の姿を真摯な筆致で描出しており清浄な感を覚えさせる遺像である。

㊱山本條太郎像（梶原貫吾画）

昭和時代（昭和十二年）

油彩キャンバス　四九・五×五九・五糎

本館蔵

山本條太郎（一八六七～一九三六）は、福井城下で生れ、明治六年上京、同十五年三井物産横浜支店に入社し、同四十二年には、常務取締役に就任した。大正三年三井を去って多くの事業会社を創設、同九年衆議院議員に当選、以降政治家となった。しかし再び実業界でも活躍。昭和二年～四年、南満州鉄道株式会長の社長（或いは総裁）となり「満鉄中興の祖」と呼ばれた。昭和十年、貴族院議員に選任されたが翌十一年七十歳で歿した。本像は、昭和十二年、光風会画家、梶原貫吾の筆によるもの。條太郎が初代社長を務めた徳山市の日本精蝋株式会社に久しく保管されていたが、昭和三十六年四月、松平永芳氏が発見し当館へ寄贈されたものである。

㊲東郷正路像（大久保喜一画）　一点

大正時代

油彩・キャンバス　五二・八×四〇・八糎

本館蔵

東郷正路（一八五二～一九〇六）は、旧福井藩士で、明治一〇年海軍兵学寮を卒業し、累進して海軍中将となった。日露戦争では、第三艦隊第六戦隊司令官として軍功があった。明治三十九年一月に歿したが、生前の勲功によって嗣子、安に男爵が与えられた。

キャンパス表に「K.Okubo」とあり、また同裏に「大正元年九月二十四日謹写之　大久保喜一」とある。本像は、平成元年三月、東郷家より寄贈を受けたものである。

㊳西脇呉石（ごせき）像　一点

昭和時代

油彩・キュンバス　四〇・九×三一・九糎

本館蔵

西脇呉石（一八七九～一九七〇）は、書道家で、名を静、号を

呉石と称した。勝山藩士の孫として現勝山市に生れる。三歳から墨書に親しみ、成器尋常高等小学校をへて福井男子師範学校に入学した。在学中、巻菱湖の門弟、村田梅石に書を師事し、卒業後、武生町立高等小学校訓導となり、のち福井高等女学校教諭となる。漢詩を富田鴎波、南画を長田雲堂に学んだ。教科書の手本を著わしたことから、東京の青山師範学校・府立第三高等女学校で教鞭をとった。梅石歿後、日下部鳴鶴に師事。大正六年、文部省国定書方手本の揮毫を委嘱された。昭和十四年、東京商科大学講師となり文化書道会を主宰し、書道界の重鎮として教育・文化振興に偉業を遺した。本像は、西脇家より当館に寄贈された西脇呉石関係史料の一つで、昭和五十一年呉石七回忌法要に際し描かれたものである。

キャンパス表の右下に「'76 ART yosoi」とサインがある。

㊴新道繁自画像　　一点

昭和時代（昭和二年）

油彩・キャンバスボード　二三・〇×一五・五糎

福井県立美術館蔵

新道繁（一九〇七～八一）は三国町生れの洋画家で、十歳で上京、十八歳で帝展に初入選。独立展等への発表を経て、日展及び光風会で作品を発表した。昭和三十五年頃から松の絵を好んで描き「松の画家」と呼ばれる芹川貞夫氏が、光風会理事長・日展理事・日本芸術院会員であった。画風は「内省的で詩情があり、一時抽象的になる」と評されている。キャンバスに、「Shigeru shindo 1927」とサインがみえる。

㊵三上誠自画像　　一点

昭和時代（昭和十九年頃）

鉛筆・用紙　三四・五×二五・二

福井市　三上誠資料館蔵

三上誠（一九一九～一九七二）は、日本画家。嶋田和左九・キクイの二男として大阪市に生れる。十七歳で親族の三上家を相続し、旧制福井中学、京都市立絵画専門学校（現、京都市立芸大）日本画科を卒業。日本画の革新的研究グループであるパンリアル美術会を結成して活躍、前衛日本画家として新領域を開拓した。代表作に『F市曼荼羅』『炙点万華鏡』がある。本像は昭和十九年頃即ち三上二十五歳頃の自画像である。

㊶土岡秀太郎像（堀田清治画）　　一点

昭和時代

油彩・キャンバス　四四・〇×三六・五糎

福井県立美術館蔵

土岡秀太郎（一八九五～一九七九）は、前衛芸術運動の組織者、古九谷研究家。現武生市春日野生れ。武生中学卒。大正十一年、木下秀一郎・堀田清治らとともに北荘画会を結成した。戦後は、北美文化協会を組織して、主宰。三十年の長きにわたる前衛芸術運動を指導し、河内勇・八田豊・橿尾正次・山本圭吾・五十嵐彰雄らを育てた。「作家はいつも前衛精神を志向し同時に前衛を育てる基盤として地方文化の発展に参画すべきだ」という高邁な芸術思想は、その後の本県の美術・文芸界に大きな影響を与えた。なお実兄は「鳥の春郊」として知られる日本画家、土岡春郊（一八九一～一九五八）である。堀田清治（一八九八～一九八四）は、福井市生れの洋画家。北荘画会の主要メンバーの一人。昭和三十三年新槐樹社を創設・主宰。昭和五十年日展文部大臣賞受賞、同展参与となっている。

㊷松平慶民像（川端哲雄画）　　一点

昭和時代（昭和四十九年五月）

油彩・キャンバス　五二・八×四五・四糎

本　館　蔵

松平慶民（一八八二～一九四八）は、松平春嶽の実子で、最後の宮内大臣、最初の宮内府長官を務めた。春嶽より分与された遺墨・遺品類を、春嶽公記念文庫として東京に創設。のち、これが長男、永芳氏によって戦後福井市に寄贈された。この画像は、昭和二十一年一月十六日、宮内大臣室において撮影した写真を元に川端哲雄氏が描いたものである。額裏書に「春嶽公記念文庫創立者春嶽松平慶永公嫡男　松平慶民氏肖像」とあり、キャンバスの裏書に「松平慶民氏肖像　一水会会員　川端哲雄謹写　昭和四十九年五月」とある。一水会は、戦後の洋画壇において重要な働きを果した美術団体で、二科会より分化した。

㊸井上幸子像（MrAL画）　一点

明治時代（明治四十年）

油彩・キャンバス　四五・六×三五・六糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

井上幸子は、福井十六代藩主松平春嶽の実子で、最後の宮内大臣であった松平慶民の夫人である。明治二十四年一月、男爵、新田（岩松）忠継の四女として生れ、井上馨の養嫡子、勝之助（馨の実弟）の養子となった。こののち、松平慶民夫人となり、二男三女をもうけて、昭和二十三年一月に歿した。本像は、明治四十年（一九〇七）英国ロンドンで、当地のコマーシャル・ペインターに描かせたもののようである。

㊹黒田　實像　一点

昭和時代

ペン・紙　四五・〇×三七・五糎

本　館　蔵

黒田實（一八九九～一九七七）は、武生市黒川町の生れ、旧制武生中学、東京外国語学校英語部文科を卒業後、教員生活。のち宮内省に入り大正天皇大喪使書記を務めた。昭和二十年十二月、宮内事務官兼式部官を務め、皇室と進駐軍司令部との間にある専任連絡官となり、皇室の国際的地位向上に尽力した。本像は子息瑛氏より寄贈されたものである。

㊺冨田惣七像（玉村晋一画）　一枚

昭和時代（昭和二十二年）

鉛筆・洋紙　三七・二×二八・二糎

丸岡町　個　人　蔵

冨田惣七（一九〇九～八七）は洋画家で、福井市生まれ、帝国美術学校（現、武蔵野美術大学）を卒業した。戦後、玉村晋一・松崎真一と三人で、美研会を結成した。私設美術館を三人で建て、各人の作品発表の場を設けたが、区画整理で取り壊された。「ラ・バクール」のメンバーとしても活躍、独立展にも出品している。本像の右下に「冨田氏像1.3.1947.片山津Shinich Tamamura.」とあり、昭和二十二年一月三日、片山津温泉で写生した作品である。

㊻松崎真一像（玉村晋一画）　一枚

昭和時代（昭和二十二年）

鉛筆・洋紙　三七・二×二八・二糎

丸岡町　個　人　蔵

松崎真一（一九一〇～一九七九）は、洋画家で、福井市生まれ、土岡秀太郎の知遇を受けて油絵を学ぶ。第二回独立展（一九三二年）で初入選し、田中佐一郎・須田国太郎に師事。昭和二十七年に独立美術協会会員となった。本県の戦後美術界の代表的作家である。本像は、昭和二十二年一月三日片山津温泉で、友人の画家、

玉村晋一が写生したもの。左下に「松崎直一大人像　１９４７年1月3日於片山津　Shinichi Tamamura」とある。

㊼玉村晋一自画像　一点

昭和時代（昭和二十二年）

コンテ・洋紙　三七・一×二八・二糎

丸岡町　個　人　蔵

玉村晋一（一九一八～一九五〇）は福井市の生まれ、福井中学を出て日本大学工学部に入学したが、美術を志して退学、画学の道を選ぶ。北川民次・鳥海青児らと親交を結び、帰福後は、荒木道夫・上出穂美・馬越祐一らと「榛の木」同人として活躍した。戦後の昭和二十一年、松崎真一・冨田惣七らと私設美術館を建設、同二十三年には美術団体「ラ・バクール」で活躍した。第十七回独立美術協会の独立展に出品したが、昭和二十五年七月三十一日、三十一歳の若さで歿した。本像は、昭和二十二年の自画像である。眼の大きく鋭い描写が、若くしてこの世を去った玉村晋一の高邁な美術への情熱を今日にもなお快い迫力でもって語りかけてくれる。

㊽井幕凡得像（雨田光平画）　一点

昭和時代

水彩・和紙　三八・二×三二・四糎

井幕凡得は、仏教の諸宗派を越えて仏教の根本的原理、特に浄土真宗の真髄を、辻説法によって民衆に教化した仏教思想家である。

師は明治二十七年四月三日石川県加賀市大聖寺に生まれ、神奈川県中川温泉や九州地方又は近畿の生駒山で修行した。東大願寺で得度し、帰福後は辻説法で独自の布教・教化活動を行っている。福井寺を福井市花月の借地に建立し、足羽山能楽堂でも修行したという。

昭和四十四年四月十日入寂。本像は、彫刻家で箏曲京極流の宗家、雨田光平が描いたもので、少々狂画風な趣きがみられる。

㊾榊原　仟像（今野草三画）　一点

昭和時代

油絵・キャンバス　五三・〇×四五・四糎

本　館　蔵

榊原　仟（一九一〇～七九）は、心臓外科医・医学博士。福井市宝永上町に生まれる。福井中学・第六高等学校・東京帝大医学部を卒業して、昭和十一年、都筑正男外科に入局。同十八年上海の同仁大学教授兼外科部長に就任。戦後は東大を経て、東京女子医専教授となり、二十六年にはボタロ管開存、弁切開の手術に成功、心臓外科の権威的存在となった。

三十年には、東京女子医大に、日本心臓血圧研究所を開設。また、故郷福井にも福井心臓血圧センター福井循環器病院を開設した。

学閥を越えて人材を登用・育成し、人情篤く、人格者として多くの後進医師に慕われた。

また、絵画にも天才的な才能を発揮している。今野草三は、榊原の門下の透逸で、東京女子医大教授。心臓細胞の一部を採取して、拒絶反応をみる技術を開発した世界的な心臓外科医であった。

㊿榊原　仟像　一点

昭和時代

油彩・キャンバス　四〇・九×三一・八糎

本　館　蔵

本像は、今野草三画の榊原　仟像とともに最近遺族から本館に寄贈されたもので、いわゆる写真油絵である。

主要参考文献

①川島博他編『堀田清治大回顧展記念図録』（昭和五十六年四月　福井新聞社）
②敦賀市教育委員会『図録　敦賀の文化財』（昭和六十三年二月　敦賀市教育委員会）
③徳川義宣監修『駿府と家康展』（昭和四十五年三月　久能山東照宮博物館）
④滋賀県立安土城考古博物館編『天下布武へ－信長の近江支配』（平成五年十月　滋賀県立安土城考古博物館）
⑤武生市文化財調査委員会編『武生市の文化財』（昭和四十五年三月　武生市教育委員会）
⑥日本歴史学会編『肖像選集』（昭和三十七年十二月　吉川弘文館）
⑦宮次男著『肖像画』（昭和五十年五月　小学館）
⑧京都国立博物館編『日本の肖像』（昭和五十一年十月　京都国立博物館）
⑨渡辺武著『図説　再見　大阪城』（昭和五十八年九月　大阪都市協会）
⑩高浜町教育委員会編『高浜町の美術工芸－郷土の美と心』（平成五年三月　高浜町教育委員会）
⑪福井県立美術館編『福井の美術』（昭和五十二年十一月　福井県立美術館）
⑫大阪城天守閣編『大阪城天守閣所蔵品図録』（昭和五十年十二月　大阪城天守閣）
⑬東京美術倶楽部編『肥前松浦伯爵家蔵品目録』（昭和二年十一月）
⑭田邊昌平編著『近世における大和絵の展開』（平成六年八月　敦賀市立博物館）
⑮福井市立郷土歴史博物館編『福井の肖像画』（平成五年十月　福井市立郷土歴史博物館）
⑯足立尚計著『知られざる福井の先人たち』（平成四年五月　フェニックス出版）
⑰蘭学資料研究会編『蘭学の巨星　杉田玄白・緒方洪庵展』（平成二年五月　蘭学資料研究会）
⑱久能山東照宮博物館編『徳川・松平家ゆかりの女性』（平成二年十月　久能山東照宮博物館）
⑲村井康彦「女性肖像画とその時代」（『大和文華』第五十六号）
⑳竹内尚次「武田氏をめぐる肖像画群（上）（中）」（『ミュージアム』152・164号）
㉑小林明「紙本着色　今川氏真・同夫人像について」（平成五年三月『静岡県史研究』第9号）
㉒足立尚計「旧福井藩士山県家蔵武田信玄軍陣影並びに三将図について」（『福井市立郷土歴史博物館館報』復刊第十五号）
㉓足立尚計「柴田勝春」（『Fukui』二五－二七三）
㉔石川銀栄子著『越前俳諧提要』（昭和三十九年七月　福井県郷土誌懇談会）
㉕井筒雅風著『日本時代風俗写真図録』（昭和三十四年三月　日本時代風俗館建設委員会）
㉖松平永芳「山本條太郎翁の思ひ出」（『福井市立郷土歴史博物館紀要』2）

協力者・写真提供者（順不同　敬称略）

廣木　公利
山根　有三
金春　康之
沢口　輝禅
芝田　寿朗
小栗栖健治
田邊　昌平
成澤　勝嗣
樋爪　修
渡辺　武
宮本　裕次
久保洋一郎
林　憲司
小林　明
橋本　政宣
斉藤　隆
土岡　秀一
吉岡　孝導
嶋田　正
増田　禅岳
花房　禅佑
高橋　友峰
山口　正章
平泉　泫祥
中村　敬子
松井つね子

島田　清
松平　宗紀
尾崎　寛道
阿部　正道
玉村　司朗
谷口　元一
石堂　裕昭
古川　登
松平　乗昌
越後　巌
榊原　節子
小林　巌
大武　久子
黒田　瑛
戸田　浩之
辻岡　敬三
足立　弘
赤坂　康夫
佐々木　智
藪本荘五郎
藪本　公三
長坂　一郎
芹川　貞夫
三木世嗣実
寺下　信夫
松村　忠祀

福井県立若狭歴史民俗資料館
兵庫県立歴史博物館
長浜市立長浜城歴史博物館
神戸市立博物館
西福寺
大阪城天守閣
大阪市経済局
久能山東照宮博物館
東京大学史料編纂所
龍泉寺
大宝寺
三上誠資料館
運正寺
東光寺
瑞源寺
大安禅寺
福井県立美術館
早稲田大学図書館
福井寺
越前松平家福井事務所
武生市教育委員会文化振興課
勝山市立図書館
松原神社
敦賀市立博物館
敦賀市教育委員会
アオイプロ
佐伎治神社
福井県神社庁
高浜町郷土資料館
奈良県立美術館
常高寺
小浜市教育委員会文化課
福井県立図書館若狭分館

展示指導助言　主任学芸員　西村英之
企画　図録編集　主任学芸員　足立尚計
図録解説

続・福井の肖像画

発行　平成六年十月一日
編集　福井市立郷土歴史博物館
〒九一〇　福井市足羽一丁目八番十六号
電話（〇七七六）三五―二八四五
印刷　河和田屋印刷株式会社

限定四百部のうち第 86 番

福井市立郷土歴史博物館